

みなさん、はじめまして。

JICA (国際協力機構) 日系社会 シニア・ボランティアとしてアルゼンチンに派遣されました小澤道子です。7月26日に、アルゼンチン東北部にあるサルタ市に、日系日本語学校の日本語教師として赴任します。今は、ブエノスアイレスでスペイン語や安全対策などの研修を受けています。

6月27日に、約29時間をかけて、ここアルゼンチンのブエノスアイレスに到着しました。ブエノスアイレスは、狭い石畳の道にアンティックなゴシック建物が立ち並ぶ、まさに南米のパリと呼ばれるにふさわしい街並みです。

『アンティック』という言葉の響きは、裏を返すと日本から来た私たちには『不便』なこともあります。そして、不便であるために生まれる『暖かい人間味』にも出会うことができます。

数回にわたって、私の活動と私が感じたアルゼンチンの様子を皆様にお伝えできれば、大変うれしく思います。

今回は、アルゼンチンの最初の港町であったボカ地区をご紹介します。

このボカ地区は、イタリアからの移民が共同生活を送った町です。トタン屋根の貧しい建物をカラフルに彩り、その中央に中庭を作って、集いの場にしました。労働者や船乗りが、ここでお酒を酌み交わし、仕事の疲れを癒したそうです。そして生まれたのがアルゼンチンタンゴです。貧しいからこそ、苦しいからこそ、そこからほとばしる情熱があつた官能的なダンスとなりました。また、世界有数のサッカークラブチームであるボカ・ジュニアーズもこのボカ地区にあります。貧しい移民の子供たちはボール一つでプレイすることができるサッカーに夢中になったのでしょう。貧しいからこそ、そのハングリーさが、世界有数のクラブチームを生み出したのだと、この地を訪れて納得しました。しかし、観光地として開放されている通りを一步踏み出すと、今も貧しい生活をしている様子がうかがえます。夜は決して行ってはならない危険地域です。



